

### 仏教について 上田 紀行（東京工業大 学大学院准教授）

#### お墓を必至に確保しよう というお寺の動きに ついて

これを見て、すごく寂しい気持ちになりましたね。僕自身は、仏教がこの現代の日本の中で果たすべき大きな役割があると思ってるんですよ。ただそれが、墓を売ることなのか、あるいは檀家さんとお寺とのつながりは墓だけなのかということですね。もちろん僕は、お墓も葬式も大切だと思いますよ。ただ、それ以上、やっぱり仏教というのは、もっと大きいものであって、我々が仏教に求めているのは、もっともっと大きな使命があるんじゃないかという気がするんですよ。

#### お寺離れと仏教離れについて

おもしろいデータがありましてね、私、講演とかでアンケートを取るんですよ。

どのくらい良いイメージを持っているか。仏教に対して良いイメージを持っている人は、大体90%ぐらいあるんですね。手を挙げてもらうと。ところが、このお寺と僧侶。寺に対して良いイメージを持っている人は大体2割5分ぐらい、僧侶に至っては坊坊さんに至っては1割ぐらいなんです。つまり日本人は仏教についてのは何か良いものだなんていう、良いイメージを持ってると、良いイメージを

「どうも今のお寺はなあ」あるいは「坊坊さんはない」というふうな思っているわけなんです。これはだから、ひと言で言えば、やっぱりお寺とか坊坊さんは仏教をやってないんじゃないかということですよ。仏教にはいいイメージがあるわけだから。私も「がんばれ仏教」なんていう本を書いてから、いろんな宗派で研修に招かれることが多くて、「生き残れるか仏教」なんてテーマで講師をやる

わけですよ。さあ、皆さんどうですかというふうにお坊さんたちに聞くと「いやー、うちの寺の経営が」とか、「檀家さんが少なくなってきた」と、寺の経営のお話をまず第一にしますよ。だけれども、我々からすると、「生き残れるか仏教」というのは寺が潰れるかどうかの話ではなくて、これだけ苦しみの多いこの現代社会の中で、果たして

仏教は我々を救ってくれるんだろうか、苦しんだり、もう死にたくなったり、いろんな苦しみを果たして仏教の教えは救って、我々の心を支えてくれるのかというの、この日本社会の中で仏教が生きているか死んでいるかのメルクマール（判断基準）ですよ。ところが坊坊さんからすると、やっぱりその経営の話が、第一にきちやうというところで、やはりちよつと違うんじゃないかなって、みんな思ってるんじゃないでしょうか。

#### お寺が追い込まれた原因 について

いろんな要因があるんですけどもね。やっぱり日本のお寺っていうのは、村社会の中で、冠婚葬祭の「節」のような役割を果たしてましたよね。だから、村のネットワークがあった、その中でお葬式があったり、お墓もあつたりした。ところが、その村のネットワークがどんどんぶつ切りになっていって、そしてお葬式とか、法事とかというの「商品」のように扱われるようになりましたね。実はお葬式とかは商品じゃないわけですよ、お墓もね。なんだけれども、それが商品化されてしまったというのが、まず一番大きな要因ですね。そしてもう一つはやっぱり、坊坊さんも世襲になってきましたから、何か家業になってしまっている。本当に仏教のことを信じている坊坊さんというのは、そんなに多いのかわからない問題があります。自分

が果たして仏教の教えで救われたのか、ではなくて、何か家業で家を継がなきゃいけないからといって、話をなさってる方もいます。あともう一つ、一番大きな要因は、我々在家の人間も、そんなにお寺に期待をしてきたのか。あの経済発展の右肩上がりときに、結局のところ、「人間の苦しみにお寺が向き合ってくれ」なんてことは期待しなくて、「まあお金がもうかればいいじゃないか、坊坊さんは来てくれてお経を読んでくれてお布施を持って帰ってくれば、そのくらいでいいんだ」。つまり期待感もなかったということですよ。その期待感がない、そしてお寺のほうは追い詰められて、その悪循環のなれの果てが、現在なんじゃないかなというふう

#### 僧侶・川浪さんの「先行きが不透明な今の時代こそ、仏教は底力を発揮する」という言葉について

若方丈さんや御手洗さんなどの世話役さん、法心寺の門徒さん、境内地にお墓を建てている方々、有縁の方々によって晴天のなか本日に素晴らしい花祭りでありました。

#### 右ページより続く

今からが出番という言葉があります。印象的でした。やはりお寺やお坊さんの果たす役割、今の時代だからこそ、大きいということなんでしょうか。やっぱり格差社会というように、こどもいわれてるし、勝ち組、負け組という言い方もありますよね。つまり高度経済成長のときに、我々は「生老病死」の苦勞というものは考えなかったわけですよ。なんかどうも楽になつていくんじゃないか。だけど、今は、我々がどっかに苦に直面しているぞという時代になってきましたよね。だけれども、負け組の人たちは、自己責任だとかいつて切り捨てられようとしている。やっぱりそのときに、そんなことはないんだ、この世の中は「支え」というものがあるんだ、というその行動を見せてくれるということですね。実際に救われる、その行動の支えも重要だと思う

んです。僕はここでもう一つ強調したいのは、この日本社会に支えがあるんだという、支えのイメージというものを表現しているということなんです。つまり僕たちは何が起つても支えてくれるものは何にもないんだという、ものすごく荒涼としたイメージを生きてると思うんですよ。これは小学生に聞いても、誰に聞いても一度いじめられちゃつたら、もう誰も救ってくれないぞとか、そういうイメージの中で生きています。ところが、こういう坊坊さんが出てきてですね、そして、コンビニの2倍ある7万6000のお寺の前を通つたときに、我々日本人が、「ああ、この中にはある人は念仏をしている人、ある人はお題目唱えているし、ある人は座禅しているけれど、なんとしても人の苦しみを救いたいという人が何百年何千年の伝統の中で、頑張っているんだ」ということを思うことがで

きたらね、そのうちの小学生が例えば、キレたりとか、引きこもりになったりとか、あるいはリストラされて自殺したりとか、そういう荒涼とした「支えなき日本社会」っていうもののイメージをもう一回、変えていくことができるんじゃないか。これは大きな日本社会の変革の運動になつていくと僕は思います。実際に助けること、それから助けのイメージを作ることが仏教に求められている。それが、宗教の原点だと思います。



### 森町店

四月8日花祭り  
蓮華寺さんで今年もお釈迦様のご誕生日、お釈迦様のお像に甘茶をかけてお祝いする花祭りがとり行われました。法心寺の



若方丈さんや御手洗さんなどの世話役さん、法心寺の門徒さん、境内地にお墓を建てている方々、有縁の方々によって晴天のなか本日に素晴らしい花祭りでありました。マヤー夫人が出産のために故郷に帰省される途中、4月8日、美しい花が咲き乱れる「ルンビニ園」という花園で生まれましたので、お釈迦さまのお誕生日を花祭りといつて祝います。日本で花祭りが最初に行われたのは、推古天皇14（西暦606）年のこと。『日本書紀』には、この年の4月8日に、銅と繡（ぬいもの）の丈六（1丈6尺、約4.89m）のお像が完成したことや、この日に開かれた齋会に、数えきれないほどの人が参集したことが記録されています。来年も益々盛会になりまますよう